

# 源流景観の探求と「多摩川源流景観シンポジウム」の開催

2013年

木下 正之

小菅村源流景観計画策定委員会 委員長

共同研究者：古菅 丁 源流百姓の会会長  
黒川 文一 源流振興課長  
木下 拓郎 源流振興課主任  
中村 文明 源流研究所所長  
望月 徹男 NPO 法人事務局長

## 記念講演 「源流景観の特性 その保全と活用法」(要約)

中村良夫 東京工業大学名誉教授

平成 24 年 9 月 29 日 小菅村体育館

### 移動は景観を味わう重要な条件

東京というのは 1000 万の大都会でありまして、世界有数の都会である。しかし東京からただか 2 時間でこんなに清々しい山懐に入れるのは、本当にあらためて日本人として驚きでございます。奥多摩まで入ってきますとだんだん谷が深くなってきますから、山の稜線が少しずつ見えなくなって、何重にも繰り返される山ひだの深さ、奥行きが印象に残って参ります。こういう賑わいのある大都会のすぐ側に奥深いところがあるというのが特徴です。今回、小菅に来てみて、改めてそういうことを実感したわけでありまして。この奥行きの深さは小菅だけにいるとよく分からないが東京から移動してくると非常にそれがよく分かる。そのためには移動してきて東京と小菅の移動ということ、これが景観を味わうための 1 つの重要な条件ではないかというようなことを改めて感じたわけです。

### 住まいの理想は庭に囲まれた家

これが有名な江戸の幕末の絵でございます。一番重要なことは山、川、海、丘陵地帯、こういう山と川なんです。江戸はこういう山や水に抱かれているということが大変自慢だった、ということです。日本人の住まいに対する理想というのが非常によくでています。住まいというのは清々しい山水に囲まれている場であるというのは、非常に重要。理想の住まいというのは庭に囲まれている家なんです。庭というのは非常に重要で、清々しい山水に囲まれているということが重要。西洋の家づくりにとっては建築というのが中心なんです。日本の場合は建築もちろん大事ですが、それを囲んでいる自然というものが非常に重要になってきます。

### 我々が景観を考えると重要なこと

今度の小菅村を見ますと改めて感じますが、人の住んでいる村というのは非

常に小さなもの。それを取り囲んでいる山、あるいは川の骨格が極めて重要です。そういうことは昔の縄文人にとっても、100万都市にとっても同じように重要なのは山や水。そのことは個人の邸宅でも全く同じで、座敷からいい庭が見えるというのが日本人にとっての非常に重要な格式であって、格調高いというのはそういうこと。このことは我々が景観を考える時に重要だと私は考えます。ですからこういういわゆる山水というものが、言ってみれば山と川しかないようですが、実はこれが非常に重要です。

人間が価値をつけたものは文化である

これはもう自然であると同時に文化、人間が特に価値をつけたものだからただの自然ではなくて、これは文化である。山水というのは実は文化であると言ってよろしい。大体山水という言葉自身が東アジアで生まれた言葉なんでしょうけど、たくさんいろんなものがある中から、山と水が文化に結びつけているのは人間の持っている価値観ですよ。だからこれは自然ではなくて文化。だから我々の考えている、取り囲まれている、山とか川とか田んぼ。田んぼはもちろん人間が造ったものですがそこに何らかの価値を人間が与えた。それは文化だと言っていいと思います。

そんなわけで、今回は私は山梨県の景観に少し取り組んできました。同時に小菅村もその中に入っているわけです。多摩川の源流域、相模川の源流域ですが、山梨の中でどういうふうに扱うかはまだ煮詰まっていません。今日、幸い皆さんとお会いすることができて、谷の景観というものを、実態を住民の方がどういうふうに考えているか知る機会がありまして、大変参考になりました。

谷がもっている独特の雰囲気

(写真を見ながら) これは小菅全体の山、大菩薩の方に行く、谷の一番奥、こういうところは谷の構造の中で一番象徴的なところですが、三頭山もそうです。入り口のところとか、あるいは全体の集落のあるところの十字路になっているところ、カーブ点とかいくつか非常に大きなポイントがある。そういうところは大事にしたいと思いますが、これは少し研究してみたいと思います。いずれにしても、谷というものがもっている独特の雰囲気、少しこれから皆さんのレポートを読みながら研究していきたいと思っています。後で少し私の感想も申し上げますが、そこに行く前にもう少し景観に関してお話し上げたいことがありまして、これは後ほどの小菅に非常に関係ある話です。

## 場の気配・山の気配・水の気配が大事

景観というのは普通はどんなふうを考えられているかと言うと、目で見たときに絵になるような美しさというのが単純な捉え方です。写真機で写したような美しい映像化。これは有名な御坂峠の富士山です。構図的にも、富士山そのものが格別に美しいんですが、絵になる、人間の非常に視覚に感知したもの

ところが景観というのはどうもそれだけではなさそうで、これも前に県のシンポジウムで引用したんですが、甲府盆地に住んでおられる飯田龍太さんという有名な俳人の句に、「水すみて四方に閑あり甲斐の国」。甲斐の国はこの場合、甲府を中心にした盆地を言っていると思われます。「四方に閑あり」は周りを囲まれているということです。これは、非常に視覚的なものよりも非常に触感的で体全体に感じているような、山に体ごと囲まれている、ちょうど着ている洋服の感じ。視覚より体の感じなんです。こういうのは形ではなくて、場の気配、山の気配、水の気配、そういうのが大事なんです。さっきのお話の中でちょっと面白いなと思ったんですが、小菅は小菅の匂いがあるとどなたかおっしゃった。多分山深いところ、空気の非常に清らかな生活、独特の匂いがあるんでしょう。こういう気配というのは、形ではない、場の気配。そういうふうなことまで考えないといけないのではないかと私は思います。

## 山の気配が入ってくるという所が非常に重要

ですから景観は視覚的なものと五感全体で感じる、味もその場所で特有のものを食べたり、匂いを嗅いだり触ったり。ざらざらする、水が冷たい。そこまで考えるのがいいのではないかと思います。要するに生活全体としてその谷や盆地の雰囲気を感じ取る。誰でもやっていることで、景観はそこまで広げた方がいいんじゃないかなと思います。だから当然食文化も入ります。実際小菅の景観計画には食文化も入っています。

これは信州の松代です。松代はこういう山に囲まれた小さな扇状地、小さな流れがたくさんございます。それが各屋敷の中を貫通しているわけです。こんな小さな流れが入ってきて、各屋敷の中でこれが池に取り込まれてそこから出てまた次の家に入って来る。こんな小さな村ですが、これは山から流れ出てくるのでこれを通っているうちに山の気配が入り込む。小さな町ですので山も実際に見えます。しかし、ここに山の気配が入って来ると言うところが非常に重要です。確かに山は見えています、これがもしなかったら、それほど面白く

ない。やはりここに深い山を思わせるような気配があるということです。風み  
たいな感じ、水と風、そういう気配が感じられるような都市を造っていくこと  
がやはり日本の都市には非常に重要なことではないかと思えます。こういうこ  
とも景観というものに含めて考えた方がいいと思えます。

気配や揺らぎは場の体系にとって非常に重要

あるいは山や水の場ということを申し上げましたが、場というのは形だけじゃなくて気配です。それが日本人にとっては非常に大事なことでして、例えば季節とか雨が降る、雪が降るとか、場の揺らぎ、これは季節による揺らぎ、天候による揺らぎ、というものが場の体系にとっては非常に重要です。形よりも揺らぎの方が重要です。雪のもっている気配を強めるような工夫がたくさんある。あるいは風の流れというものがある。風の流れは目に見えない。けれどそれを何とかして体で感じるように増幅する装置がいろいろある。風鈴、目に見えないような場の変化、揺らぎというものをこういうもので、小さなもので受信して増幅して再発信する、そういう装置ですね、そういうものを日本人は発明した。風景というのはこういうところまで含めて考えるのがいいのではないかと思えます。

水の流れ・風の流れ・場の揺らぎなどを開発してほしい

この小菅村の場合は水の流れもあるし、風の流れもあるし、そういう、場の揺らぎというものがたくさんございます。是非そういうものを開発していただきたいと思えます。このぐらい広げた方が景観上たてやすい。あまり写真機で撮ったような美しいところばかりでは行き詰まっちゃう。我々の体全身で感じ取るようなものをなるべく入れるようにした方がむしろ景観上たてやすい。生活の中で楽しめるようなものが出てくるのではないかと思えます。

これは高崎からちょっと入ったところで榛名山の参道で、突き当たりが谷の一番奥、そこに榛名山がある山深いところです。こういう山深い気配、雰囲気というものを壊すようなものはなるべくなくす。ここは看板を全部作り替えした。看板は作り替えたが電柱はまだ取ってないです。こういう電柱みたいなものは雰囲気、気配を非常に乱すというか、これは工夫しただけでとてもよくなりました。なぜ、看板がいけないかというところなんですか。あるいは景観防止策なんて非常に小さなことなんですが場の雰囲気に対する影響は非常に大きい。だからこの村の計画でも景観防止策みたいなものは、茶色にしようとかちゃんと書いてありますね。それは正しいことだと思います。ああいう小

さなものでも場の雰囲気には重要ですから大きいです。

### 回遊すればその度に景色が変わる

もう少しこれを景観ところに広く考えましょうという話で、源流の景観文化を生かした村づくり、山村という場の気配、雰囲気を象徴するようなものはどんどん取り入れればいい。だから温泉とか、食文化、お祭り、歳時記、水の文化、季節の揺らぎ、季節の雰囲気、もう一つは場の雰囲気を感じさせるためには、回遊するということが非常に重要になってきます。回遊すると、場そのものはあまり変化しなくても人間が回遊すればその度に景色は変わってきます。風の動きも変わります。雰囲気が変わりますね。その雰囲気が変わるという時が一番重要で、一番最初に申しましたように、この村の奥深さというものは東京から来ると非常によく分かる。移動してくることによって場という微妙な表情がとてもはっきり感じ取られます。ですから日本の都市の場合、都市を回遊するということを江戸時代、あるいはもっと昔、平安時代から国土を回遊するということを日本人は非常に好んだし、重視したんです。

### 村独特の風物を開発すること、装置・仕掛けをつくる

この小菅村に関していいますと、装置、仕掛けというものをお作りになることがいいことだと思います。場の奥行き感とか、見え隠れ、歴史観とか時間の奥行き、この川池の集落は天神山という重要な場でもありますが、あれは単なる自然ではなくて小さなお城の跡ですから。ああいうものがなぜ重要か。時間の奥行き、空間の奥行き、両方が場にとって非常に重要なことであります。

風物という言葉はなかなかいい言葉じゃないかと思います。風物というのは場の気配です。小菅の場合は溪流とか山の幸もいろいろありますけど、おそばとか、食べたときに場の雰囲気、気配を感じる。そういうものは景観といえる。

場の雰囲気を感じ取る受信機を使う。そういうものは他にもたくさんありますでしょう。温泉ももちろん、この建物もちょっと、温泉という感じはしない、なるべくお湯というものを感じて、それが村全体の気配を感じ取れるようなデザインを工夫したらもっと素晴らしい。ですからこういうのは普通は景色と言わないんです。風物と言う。これも日本語としては非常に面白い言葉ですね。曖昧です、曖昧だから面白い。この村独特の風物というものを開発していくということが重要ではなかろうかと思います。

### 場は庭・市場 庭とは町に開かれた共同体の社交の場所

今、場という言葉は何回も使いまして、やや耳障りだと思えますけど、「場」という言葉はもともとは「庭」という言葉から出た言葉だと言われています。「二ハ」というのは普通こういう字「庭」を書くんです、今は。昔は必ずしもそうではなかった。昔はどういうふうに書いていたかという、例えば「市庭」、今はほとんどこういう言葉は使いません。この間たまたま倉敷に行ったらこういう言葉を使っていてちょっとびっくりしたんですが、これは中世の言葉遣い。「場」とは「庭」のことなんで、でも現在我々が使っている庭ではなくて、一種の共同体でやる作業とか行事とか芸能をやる場所を「庭」と言っています。

ですから市場は共同体が1つのマーケットで個人でやるわけではありません。あるいは京都に行くと、今川に半分ど真ん中で通り際になっていて炊事をやる場所がある。一家みんなそこで共同体で食事を作る、そういう作業をする場所を庭という。私はそういう古い型の庭の使い方、市場、舞神楽とか神社の中の能とかお神楽、この型の庭は美しいことを思い出してみたらどうだろうか。都市の中に普通家屋敷に閉じ込められたものを庭と言っているんですが、そうではなくて、都市へ解放された庭を考えてみる。それは昔の小さな庭、場というのと同じです。普通の家の中にある町になっている、町に開かれた共同体の社交の場所。この場所というのは人間にとって楽しい場所だと思うんです。共同体の場所なんです。こういうところを町庭の文化という。

水と陸が曖昧、融合して庭になる 川池の川はいい感じになる

東京の明治時代、石神井川という川が流れていまして、こちらに料亭がザーと並んでいて、ご覧のように神社の境内から料理屋さんが建っています。料理屋さんで川風に吹かれながら、岸にも同じように料亭があった。こちらはちゃんとした立派な庭があります。庭も面白いことに川の中に引き込んだ灯籠が立っていたり、松の支柱が水の中に入っていたりして、水と陸の関係が非常に曖昧な感じになっています。こちら側にも庭があります。こちらから庭を見たんじゃない。川の中で魚が泳いでいるか見たり、あちこちしながら楽しんでいる、これが町庭なんです。これは半分公共のものです。こっちは半分は仕切ったもの。融合しててそして庭なんです。これは古人が非常に好んだ図柄で、昔はたくさんありました。京都に行くと今でもあります。私はこの村に来て、最初に思ったのは、川池の川はこういう感じに近くなり得るのではないか。今は釣り堀みたいになっていますが。非常にいい関係です。こういう形のものを少し考えたい。

これは京都の例ですが、高瀬川のところに新しくできたミタライ橋です。こ

っちは公共の川で、こっちはプライベートになっていますが、ピッタリ融合しちゃっているんです。こういうところで食事したり飲み物を飲んだりしていることが非常に重要です。食べ物というのは人間と人間の間に関係を呼ぶわけです。こういうところが近い。それは人間の五感を共有するということは、人と人を結びつける。それと山水を結びつける。これが日本の町庭の基本的な精神。これは商売をやっている料理屋の門構えです。すだれとか、面白いのは木が一本立っていること。これだけで立派な小さな町庭になっている。これは門前という飾りがつく長い日本の伝統でした。

### マコモの門飾りは素晴らしい

ここに来るときに入り口にマコモのお飾りがあって、ちょっとびっくりしたんですが、マコモがああいうふうな形で、もともとはマコモダケを作るために工夫なされたと聞いていますが、今度の小菅の計画の中には、マコモダケを作るというのが入っていますね。普通、あまり景観計画の中にはそういうことを書かないんですが、むしろ農産物計画です。ところがあれがかいてあるところに非常に感心したんです。マコモを植えるとそれによってある農産物が出来ます。それだけじゃなくてそれで景色ができます。

### 景観が芽を出して育っていく仕掛けを作っている

しかも、面白いことにマコモダケを門飾りに使ったということが素晴らしい。そういうふうにして風景が出来上がってくるんです。この景観計画の非常に面白いところは、景観そのものもあるんだけど、景観が芽を出して育っていく、仕掛けを作っている。源流大学がその典型かもしれません。若い人たちがたくさんしょっちゅうはいつている。ここで焼酎か日本酒、あるいは田んぼを作ったり、里山を手入れしたりすれば明らかに景観は変わってきます。そういう仕組みを作っていくということが景観計画の中に入っているということがとても面白いと思います。

景観計画というのは、対象を計画するだけではなくて、その計画を作って実行していく人間を同時に育てていくということが両方入っている典型的な例です。芭蕉の有名な句なんですが、「霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き」富士山が霧で隠れて見えないのもなかなかいいと。ここからは富士山は直接見えませんが、大菩薩峠まで行けばそういう気配が、芭蕉は気配だけで十分だと。だけどそれはそういう感性を持った人間がいるからそれは受ける。

### 小菅村の計画には人間教育が明らかに入っている



だから景観計画はそういう雰囲気を作ったり、楽しむ人を同時に育てていくような形のものが景観計画としては最も優れていると思う。小菅村の計画には、そういう人間教育というものが明らかに入っている。沢山の人がこの景観計画に参加してますね。そこでいろんな議論をしている。そうして作る人自身がもう景観計画に組み込まれているという感じがしました。そこに私は非常に感心しました。井上靖さんは静岡で生まれたんですが、自分は富士山に見つめられている感じがすると言っているんです。普通は景観というのは人間が富士山を見るんですが、富士山から見つめられている。そういう感性を持った人間にはそう見えるということです。これは人間そのものが景観の中に入っていないと景観というものは成立しないということです。

文明さんの作った源流絵図、非常に感心したのは、絵の中に名前が書いてある。こういう山というのは、名前をつけた瞬間にこれは自然ではなくて、文化になるわけであります。山というのは、雲みたいに茫漠としたものですからなかなか印象に残りにくいんですが、こういうふうにして言葉を書かれたことによって、山は文化になります。こういうのは私は景観計画の中に入っていると。つまり、言語というのは非常に重要な景観計画の道具であると思います。

各地区の景観については時間もないので飛ばします。

小説は書き出しが非常に重要である

最後に思い出したことがあるんですが、多摩川に関わったのはもう30年以上前で、多くの市民団体から多摩川を何とかしろと言われ、少しずつ水質もよくなりつつあるんですが、まだ良くない。その時に多くの市民が多摩川のことを心配して、これからどうしたらいいのかと、京浜河川事務所、昔は工事事務所でしたが、いろんな人を集めて議論したんです。その時の委員長さんは三浦朱門さんで、小説を書いておられました。川の専門家ではありませんでした。彼が言ったのは、多摩川とは1つの物語りみたいものだ。長い、まさに大河小説。一番下流部の川崎とか大田区というのは大河物語り、多摩川の結論みたいなもので、大団円。そこで物語りがはっきりとした完結的な形をとる。しかし、小説では書き出しが非常に重要である。最初の1行の書き出しに何週間も時間をかけて考えるんですが、最初の1行を書き損なうと誰も読んでくれない。最初の1行というのは多摩川の源流のことです。ここをしっかりとやらないと物語りは誰も読んでくれませんよ、と言いました。彼は小説家だからそういう言い方をしたんです。後は専門家が考えてくれと、そういうことでしょね。

小菅村は、一大河川小説の書き出しの重要な部分

まさに小菅村は一大河川小説、大河小説の書き出しの重要な部分、プロローグですからそれにふさわしいものを是非作っていただきたい。彼がまさに言うように、それは川というものをどう考えるか、川は自然ではなくて文化だと。もっと言えば、川は文化でもあり、自然でもあり、行ったり来たりする。こういうふうに曖昧なものなんです。日本人の自然観の重要な特徴は、自然でもあり、文化でもあり、行ったり来たりする、そういう曖昧さにあるということは、今や国際的にも非常に注目を浴びて、常識化しています。そういうことを、我々のもっている風景文化とか自然と文化の融合性というものの特徴を、大きな世界的な普遍性をもった一つの大スタイルであるということをもう一回噛みしめながら、小菅村の将来の景観を考えていったらいいなと思います。

## 今年度の協議会活動の経過・特徴と今後の活動計画

平成25年3月26日

小菅村源流景観協議会

委員長 木下 正之

### (1) 平成24年度の活動経過と特徴について

- ・第1回協議会 7月11日 協議会を結成 24年度の計画協議
- ・景観ワークショップ 7月16日 白沢・源流大学で開催。意見交換
- ・第2回協議会 7月31日 景観シンポジウムの企画検討
- ・第3回協議会 9月4日 景観シンポジウムの内容検討
- ・第4回協議会 9月19日 景観学習会、各地区学習会の協議
- ・景観シンポ 9月29日 小菅村体育館で景観シンポ開催
- ・長作学習会 10月22日 学習会、グリーンベルト 意見交換
- ・第5回協議会 10月26日 各地区景観の開催協議
- ・景観学習会 10月31日 神谷先生、山梨県を講師
- ・忍野村景観視察 11月12日 協議会、議員団と合同視察
- ・中組学習会 11月20日 グリーンベルト、景観づくり、意見交換
- ・川池学習会 11月27日 グリーンベルト、景観づくり 意見交換
- ・第6回協議会 11月30日 グリーンベルト
- ・小永田学習会 12月12日 学習会 意見交換
- ・東部学紹会 12月20日 学習会 景観づくり、意見交換
- ・第7回協議会 1月18日 グリーンベルト、景観条例案 協議
- ・第8回協議会 2月20日 県推進大会報告 景観条例案協議
- ・第9回協議会 3月26日 活動経過と今後の予定

### (2) 今年度の活動の特徴

- 源流景観シンポの開催と景観イメージの獲得（中村先生の記念講演）
- もみじ橋の完成と周辺整備 新しい魅力ポイントの基盤整備。
- グリーンベルト整備 目に見える成果。変化する村をアピール。
- 各地区学習会の開催。各地区の委員の奮闘、サポーターの芽生え。
- 御所車の眺望点の整備。目に見える変化を村民が体験。地名への意見。

小菅村源流景観計画の策定、小菅村源流景観条例・小菅村源流景観条例施行規則・小菅村源流景観保全基金の4本柱が確定されると、大きな基盤が整ったことになる。現在は、その過渡期に当たる。この4本柱が揃ってこそ、力を発揮することになることを銘記すべきである。

## 今年度の協議会活動の経過・特徴と今後の活動計画

平成25年3月26日

小菅村源流景観協議会

委員長 木下 正之

### (1) 平成24年度の活動経過と特徴について

- ・第1回協議会 7月11日 協議会を結成 24年度の計画協議
- ・景観ワークショップ 7月16日 白沢・源流大学で開催。意見交換
- ・第2回協議会 7月31日 景観シンポジウムの企画検討
- ・第3回協議会 9月4日 景観シンポジウムの内容検討
- ・第4回協議会 9月19日 景観学習会、各地区学習会の協議
- ・景観シンポ 9月29日 小菅村体育館で景観シンポ開催
- ・長作学習会 10月22日 学習会、グリーンベルト 意見交換
- ・第5回協議会 10月26日 各地区景観の開催協議
- ・景観学習会 10月31日 神谷先生、山梨県を講師
- ・忍野村景観視察 11月12日 協議会、議員団と合同視察
- ・中組学習会 11月20日 グリーンベルト、景観づくり、意見交換
- ・川池学習会 11月27日 グリーンベルト、景観づくり 意見交換
- ・第6回協議会 11月30日 グリーンベルト
- ・小永田学習会 12月12日 学習会 意見交換
- ・東部学紹会 12月20日 学習会 景観づくり、意見交換
- ・第7回協議会 1月18日 グリーンベルト、景観条例案 協議
- ・第8回協議会 2月20日 県推進大会報告 景観条例案協議
- ・第9回協議会 3月26日 活動経過と今後の予定

### (2) 今年度の活動の特徴

- 源流景観シンポの開催と景観イメージの獲得（中村先生の記念講演）
- もみじ橋の完成と周辺整備 新しい魅力ポイントの基盤整備。
- グリーンベルト整備 目に見える成果。変化する村をアピール。
- 各地区学習会の開催。各地区の委員の奮闘、サポーターの芽生え。
- 御所車の眺望点の整備。目に見える変化を村民が体験。地名への意見。

小菅村源流景観計画の策定、小菅村源流景観条例・小菅村源流景観条例施行規則・小菅村源流景観保全基金の4本柱が確定されると、大きな基盤が整ったことになる。現在は、その過度期に当たる。この4本柱が揃ってこそ、力を発揮することになることを銘記すべきである。



平成 24 年 9 月 29 日 源流シンポ 開会挨拶



パネルディスカッション



パネリストとコーディネーター



中村良夫先生



発言する参加者



景観協議会の様子



長作地区 景観学習会



先進地視察(平成24年11月12日)



# 多摩川源流景観シンポジウム in 小菅村

## ●源流景観シンポジウム開催の趣旨

多摩川源流に位置する小菅村は、水源の村として、清らかな水と豊かな森を守り、四季を通して花の咲きほこる人間味溢れる源流の村を次の世代に受け継ぐために、平成23年度に「小菅村源流景観計画」を策定しました。この源流景観計画を具体化し景観村づくりへの理解と協力を広げることが開催の目的です。

## ●源流景観シンポジウム事業実施計画

■ 日 時 平成24年9月29日(土) 午後1時30分開会

■ 場 所 小菅村体育館

■ あいさつ 木下正之 小菅村源流景観協議会委員長  
松木直美 山梨県小菅村長  
馬淵広三郎 公益財団法人とうきゅう環境財団常務理事

■ 報 告 「景観計画1年間の取り組み」望月徹男(NPO法人多摩源流こすげ)  
「流域からの源流への思い」鈴木真智子(TBネット)

■ 記念講演



中村良夫先生(東京工業大学名誉教授)

「源流景観の特性  
その保全と活用法」

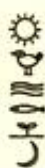
■ パネルディスカッション

○テーマ「源流の景観と文化を活かしたむらづくり」

○パネリスト

神谷 博 法政大学講師  
柴田隆行 多摩川の自然を守る会代表  
和泉恵之 国土交通省京浜河川事務所長  
酒谷幸彦 山梨県県土整備部長(予定)  
中村文明 多摩川源流研究所

○コーディネーター 宮林茂幸 東京農業大学教授



主 催 小菅村源流景観協議会  
協 力 小菅村・NPO法人多摩源流こすげ・多摩川源流研究所・小菅村観光協会  
多摩川源流大学・小菅村建設業研究会・小菅村商工会・  
小菅村女性の会 他  
後 援 山梨県・国土交通省京浜河川事務所  
連絡先 小菅村源流振興課  
〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村 4698 電話:0428-87-0111 FAX:0428-87-0933  
NPO法人多摩源流こすげ  
〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村 1918 電話:0428-87-7055 FAX:0428-87-7057

### 交通案内

西東京バス  
奥多摩駅 10:55発  
をご利用ください。



この事業はとうきゅう環境財団の助成を受けています。

源流景観の探求と「多摩川源流景観シンポジウム」の開催

(研究助成・一般研究VOL. 35—NO. 209)

著 者 木下 正之

発行日 2013年12月1日

発行者 公益財団法人とうきゅう環境財団

〒150-0002

東京都渋谷区渋谷1-16-14 (渋谷地下鉄ビル内)

TEL (03) 3400-9142

FAX (03) 3400-9141

<http://www.tokyuenv.or.jp/>